
芸劇リサイタル・シリーズ「VS」 Vol.6

藤田真央 インタビュー

2021年12月の「VS」シリーズ第1弾「反田恭平 × 小林愛実」は客席で聴いていたという藤田真央。今回、東京芸術劇場が出演をオファーしたところ、彼から「務川慧悟さんとの共演で」という希望があり、このデュオが実現した。

藤田「反田さんと小林さんの『VS』。ヴィルトゥオーゾ同士の豪華な共演に心躍りました。一方で、お二人が各々のスタイルを極めてゆえに、その力を融合させつつ音楽を完成させることには、ソロとは違った難しさがあるとも感じました。今までさまざまな室内楽の経験を積み重ねてきましたが、2台ピアノのジャンルは経験が乏しいので、もし私の番が来た時には、経験豊富な務川さんと共演したいと思いました」

〈ピアニスト 務川慧吾について〉

公演に寄せた事前のメッセージの中で藤田は、自分と務川の音楽の作り方が「ぴったり一緒」なのだ述べている。

藤田「務川さんも私も、2021年のショパン・コンクールを応援に行っていたので、ワルシャワでお話しました。私が思うに、音楽の作り方は2通りあります。一方は、音楽の表す情景を想像し、イメージを指先で描写していく方法。他方は、楽譜を1小節・1音のミクロな単位で読み、意味を熟考し、それらのパーツを構築していく方法です。ワルシャワでコンクールの感想を交換しているうちに、務川さんも私も後者の方法で音楽を作っているタイプだとわかり、シンパシーを覚えたのです」

藤田が務川の演奏を初めて聴いたのも奇しくも2台ピアノ。2台でピアノ協奏曲ばかりを弾くというコンサートだった。

藤田「交代でソロとオーケストラを担当するというコンサートでしたが、オーケストラ・パートを演奏している時は、あたかもオーケストラが演奏しているようなこまやかさが散りばめられ、豊かな響きで音楽を支えていました。ソロはたしかグリーグのピアノ協奏曲だったと記憶していますが、雄弁な歌心と迫力のある演奏に感銘を受けました」

〈ピアノ・デュオについて〉

ピアノ・デュオの楽しさはどんなところにあるのだろう。

藤田「4手連弾は、育った環境の違う二人が1台のピアノに向き合うことから、リハーサルの段階でさまざまな発見があるのが面白いですね。2台ピアノの場合は、二人のピアノの音色の違いや技法の違いを同時に聴ける、または識別しながら楽しむことができるのが魅力だと思います」

ちなみに、「聴き手にはどんな点に注目すると、より楽しめますか?」という質問には、

藤田「前述のとおり、私自身が4手連弾、2台ピアノについては経験が浅いので、楽しみ方のコツをお教えすることは難しいです。私にも教えてください（笑）」

と答えてくれた。なるほど。たしかに。

〈プログラムについて〉

プログラムは藤田の選曲。すべて舞曲の3曲が並んだ。

藤田「皆さんの心躍る舞曲を集めたら面白いのでは！と思い選曲しました。いずれの作品も舞曲ならではの愉しさを持つ一方、それぞれに異なる歴史背景や国民性を備えているので、テイストやカラーの違いを楽しんでほしいです」

特に《ラ・ヴァルス》の作曲者であるラヴェルは務川が得意とするレパートリー。11月にはピアノ独奏曲全曲のアルバムもリリースしたところだ。

藤田「曲目を決めた時点では、務川さんのアルバム・リリースについては存じておりませんでしたので、選んでおいてラッキーでした！」

一方、藤田は10月に、モーツァルトのピアノ・ソナタ全集をワールドワイド契約で世界にリリースしたところ。

藤田「今回、モーツァルトは選曲候補にはありませんでした。モーツァルト：ピアノ・ソナタ全曲演奏会を行うなど、私はモーツァルトの作品に腰を据えて取り組んでおりますが、彼の作品はとてつもなく繊細で難しいです。音数が少なくシンプルなゆえ、音楽を構成する要素がひとつでも似つかわしくなかった時、作品の完成度を維持するのが困難なのです。その意味で、短期間で連弾や2台ピアノ曲など、モーツァルトの作品に共同作業で挑むのは容易なことではないと思いました。でもいつか務川さんと再共演する機会があれば、一緒に取り組んでいただきたいです」

ヨーロッパと日本を行き来して超多忙。このコンサート直前の2023年1月には病気降板のマウリツィオ・ポリニに代わってカーネギー・ホールにデビューするというビッグ・ニュースも記憶に新しい。務川とのリハーサルの時間と場所を捻り出すのも簡単ではなさそうだ。

藤田「年末はゆっくり休みたいのでお休みです（笑）。家族と一緒に日本で静かに過ごしたいですね。年始は堤剛さん、前橋汀子さんとのトリオから始まります。その後アンサンブル金沢、ハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団と公演を行い、1月末はカーネギー・ホールでのリサイタルが控えています。2月は日本でモーツァルトのピアノ・ソナタ全曲演奏会があり、その後務川さんとのVS公演に臨むつもりです。リハーサルは、2月に日本でやるのかな」

務川との「VS」では、特に連弾が楽しみだという。

藤田「連弾だと、その人の音楽に直に触られます。たとえば舘野泉さんと連弾をさせていただいた際には、魂のこもった一音一音を文字どおり間近で感じ、その表現力に圧倒されてしまいました。務川さんからどんな刺激を受けられるのか、今からとても楽しみです」

インタビュー・文／宮本明（ライター）

※このインタビューは東京芸術劇場広報誌 BUZZ Vol.42号をものにしたインタビューのロングバージョンです。